

エスニック・コミュニティの脱領域化

オーストラリアクイーンズランド南東部における日本人コミュニティ

長友淳(関西学院大学国際学部)

グローバル化の最も可視的な状況の一つとして、移民の増加を挙げることができる。「海外」はインターネットや低価格化した航空運賃の普及などによってより往来しやすい時代になり、移住を取り巻く環境は今日大きく変化した。それとともに海外で生活する日本人も増加し、現在では100万人以上もの日本人が海外で生活している。また移民の増加とともに移住の多様化も進んでいる。リタイアメント移住やライフスタイル移住など新しい移住形態が世界各国で顕著になり、ワーキングホリデーや観光ビザでの頻繁な長期滞在などに見られるように移住や移民の概念も曖昧になりつつある。世界の各都市においては、永住者からリタイアメント移住者やワーキングホリデーなどの長期滞在者まで多用化した移民が混在する状況が発生している。

以上のようなグローバル化時代の移民をとりまく状況を踏まえると、ここで以下の二つの問題を提起することができる。多用化した移住者が混在する都市に形成・維持されるエスニック・コミュニティやそのコミュニティの内部におけるネットワークにはいかなる特徴があるのか？また、これらのエスニック・コミュニティやそのネットワークの特徴は、今日の文化人類学におけるグローバル化理論の文脈からどのように解釈することができるであろうか？

本発表はこれらの点について、移民の多用化が進み日本人も多く居住するオーストラリアのクイーンズランド州南東部において筆者が2006年から2009年にかけて行ったフィールドワークをもとに論じる。

発表は以下の3つのセクションから構成されている。初めに現地の日本人コミュニティやフィールドワークの概要について述べた上で発表の問題設定・論点を提示する。この中で、現地の日本人コミュニティが国際結婚による移住者、独立技術永住ビザ(日本における業務経験や学歴によるビザ取得)による移住者、長期滞在者(ビジネス・学生・ワーキングホリデー)の大きく3つのグループに分けられる点を述べ、日本人コミュニティ内部の多様性を指摘する。また、これらの日本人移民の大半がライフスタイル移民という新移民である点を指摘する。つまり彼らの多くは日本社会においては中間層に位置し、従来の経済的要素に起因する経済移民とは異なり、移住理由も経済的理由よりもむしろライフスタイルに重点を置く移住者が多く、日本社会における仕事中心のライフスタイルや集団主義的な人間関係、教育やジェンダーをめぐる個人的経験が移住の意思決定に作用している点を指摘する。

2つ目のセクションは、現地の日本人コミュニティの特徴について脱領域化をキーワードに考察する。この中では第一に彼らのエスニック・コミュニティに地理的・心理的中心が存在しない点を指摘する。オーストラリアにおけるアジア系移民の多くは、大都市の特定の地区に地理的な人口集中が見られ、そこにはエスニック・クラブや料理店、アジア系食料品店などが多く存在し、そのエスニック・グループにとって心理的な中心として作用している。しかし、クイーンズランド州南東部の日本人コミュニティは、その人口の規模(約1万人)の割に地理的・心理的中心は存在しない。この意味でコミュニティが地理的領域から遊離している状況をエスニック・コミュニティの脱領域化現象として捉えられる。第二に、現地の日本人コミュニティが新しい形のコミュニティを構築・維持している点を指摘する。その特徴は、彼らがネットワーク型のコミュニティを構築し、それは中心の存在しない個人が主体となった草の根型のネットワークであるという点である。その例として、無料日本語新聞などのメディアの利用、インターネットによる社会的ネットワークの構築、旅行や留学斡旋会社のオフィス空間の利用、育児グループや日本語教育サークルなどの草の根型のネットワークの構築の4例を示す。

3つ目のセクションでは、これらの新しい形のエスニック・コミュニティが、文化人類学におけるグローバル化論や今日の移民研究の文脈からどのような理論的解釈が可能かという点を考察する。この点はガルシア・カンクリーニャやアパデュライの脱領域化論やオージェの非場所概念、グリック・シラーのトランスナショナル移民に関する理論などを踏まえながら考察し、本研究で指摘した脱領域化した日本人コミュニティがグローバル化時代における新移民のエスニック・コミュニティの新しい形態の一つとして位置付けられる点を指摘する。

【 新移民、エスニック・コミュニティ、グローバリゼーション、トランスナショナリズム、脱領域化 】